

こんびらさまこんびらさま

どうか波風立たぬように

こんびらさまこんびらさま

どうか水蜜を守ってください

棧橋の上で、水蜜と頼子は手を取り合っていた。冷たい頼子の手から、小さな貝殻が水蜜の手に渡される。活動的な水蜜は、いつも体温が高めだ。おとなしい頼子の手に触れると、いつも熱が水蜜から頼子へ流れる。その感覚が水蜜は好きだったし、頼子もそれを好んでいるようだった。

すべすべした貝殻は、ふたりの頭上を覆う曇天と同じ灰色だった。水蜜は親指の腹で貝殻のすべすべした面を撫でていた。いつかこんな風に頼子の爪を撫でることができたらいいと思う。

「あてはあるの。頼子たちは」

水蜜たちの住む村は、度重なる戦乱と凶作で、じきに滅びようとしていた。村人の大半は海を生業の場とする。漁もするし、時には海賊のようなこともある。彼らは村を出て、西へ新たな土地を見つけることにした。そこに必ずしも約束された場所があるわけではない。それでも、今の村に留まって死を待つよりはましだった。

「国司様に頼ってみる……らしいわ」

「国司なんてあいづら、ただ税を取るばかりじゃないの」

「でも、守ってくれる」

頼子の父は、かつて国司のもとで働き、税を徴収する側だった。不始末があつて、家族と一緒にこの村に逃げてきた。どういいうきさつかわからないが、元の鞆に収まることになったようだ。

「でも、奴隷でしょう、そんなの」

水蜜の力強い眼差しを、頼子は柔らかい笑顔でいつも受け止める。強く握ると碎けてしまいそうで、水蜜はそれ以上頼子に強く出ることができない。

「あてのない船旅よ。どうか無事でいてね、水蜜」

「私は水難を起こす方よ、起こされる方じゃないから、大丈夫」

水蜜の不思議な力は村の中でも有名だった。

「けど、今度の旅はすごく長そうだもの。金毘羅様にお祈りしているわ」

「そうしてくれると助かるわ」

「ずっと」

「ありがとう」

「朝も昼も夜も」

「頼子」

「私が死ぬまで。あなたが死ぬまで」

水蜜は、熱い痺れが体の表面を舐めつくすのを感じる。だが、ここからどうしていいかわからない。少しでも自分の内側から出してしまえば、その瞬間頼子を焼いてしまいそうだった。